



# JFSTA NEWS

No. 31  
2015. 1. 15

目	次
会長年頭挨拶 .....1	寄稿 .....5
シニア技術専門員とその活動 ...2	会務報告 .....11
会員通信 .....4	事務局からのお知らせ.....12

## (年頭挨拶)

(一社) 全国水産技術者協会 会長 川口恭一

新年おめでとうございます。

平成 27 年の年頭に当たり、皆様に新春のお慶びを申し上げます。

暖かい日射しの正月を迎えた地方、雪の降り積もる正月を迎えた地方など日本列島の気象は様々ですが、近年の気象は「極端気象の時代」と表現をされるほど激しいものがあります。昨年も酷暑、豪雨、暴風、降雪など「観測史上初めての数値」というニュースをよく耳にしたところでは。

平成 20 年 10 月に設立され 7 年目を迎えた全水技協は、設立の目的に沿って水産に関するあらゆる分野の技術的要請に的確に対応できる体制を整備し、既存の水産試験研究機関と連携しつつ各種の事業を積極的に展開してきました。国や地方公共団体、民間企業等から試験や調査の依頼を受け、これらを円滑かつ着実に推進し発展してきました。

このような業務の実施に際しては科学的に緻密に取り組むべきことは当然ですが、常に、課題をとりまく広域環境、社会・経済動向などにも十分注意を払い、「木を見て森を見ず」というようなことにならないようにすることが重要であると考えています。菜園で鍬を使って数メートルの畝をたてる時、足下ばかり見ていると曲がった畝になってしまうように前後左右、全体に気を配りながらの作業がポイントです。

現在、当協会は会員数 84 名、賛助会員数 19 法人となっていますが、まだ会員の加入がない県もあり、更なる会員の充実を図り全国ネットワークを整備したいところです。その上で多くの会員、とりわけ地方在住会員が技術者協会という組織基盤を活用して自主的に活動を展開していけるような仕組みを整備していきたいと考えています。既に、開始している全国の増養殖についての技術的課題の調査のように多くの地方在住会員が分担実施できるような業務の拡大が期待されるところです。

本年も会員各位の全水技協に対するご理解とご支援並びに事業活動への積極的な参加をお願いするとともに、皆様方のますますのご健勝とご発展を祈念して新年のご挨拶といたします。

## シニア技術専門員とその活動

今回はシニア技術専門員として「養殖産業の実態と研究開発ニーズ調査」(独立行政法人水産総合研究センター) 業務を担当し、北海道地区のニーズ調査をお願いしている野村哲一会員からの寄稿を紹介します。

### チョウザメで町おこし —北海道美深町の取り組み—

世界三大珍味の「キャビア」で有名なチョウザメが、国内屈指の酷寒地帯にある北海道美深町(びふかちょう)で、町おこしの目玉として養殖されている。美深町は、北海道の北部、旭川市と稚内市の間付近に位置する人口約5千人の農業を基盤とする町である。旧国鉄時代には全国一の赤字路線であった「美幸線」の内陸側の始発点として、「全国一の赤字線-美幸線」の

タスキを掛けた町長が東京、銀座で観光キャンペーンをするなど、町おこしの道を求めて苦勞した経緯がある。地理的にも有望な観光地が周辺にはなく、町自体にも有力な産業や観光資源は少なく、美幸線まで廃線になるなど人口減少による過疎化が進んでいる。

そのような中で自治体としては町おこしの「目玉」を模索してきた。町は町内を流れる北海道で二番目の長さの「天塩川(てしおがわ)」に以前生息していた「チョウザメ」に着目した。チョウザメは天塩川、石狩川などの北海道内の大河川には昭和初期までは遡上した記録がある。しかし青森県以北の寒冷地での養殖の対象魚種としては目を向けられていない。1983年(昭和58年)に養殖研究所より分譲された300尾のベステル種のチョウザメを「積雪寒冷地での飼育試験」を目的に、旧天塩川の三日月湖に放流し、取り組みが開始された。放流された三日月湖は天塩川の河川改修でできたものであり、水の濁りがひどく魚影す

ら見ることはできず、成長が遅く飼育には困難が多かった。平成4年には、ビニールハウス二基内に水槽を配置し、水道水による陸上飼育を開始し、翌平成5年には初めての採卵を行いキャビアの生産ができた。平成9年には、山村振興等農林漁業特別対策事業により飼育設備と展示設備を持つ「美深チョウザメ館」を建設し、展示を行うとともに、水槽飼育による飼育尾数の拡大、親魚の養成へと規模を拡大した。町は、道の駅や宿泊施設を含む美深アイランドを整備し、展示施設でのチョウザメのPRとともに、宿泊施設でキャビアやチョウザメの肉を使ったチョウザメ料理の提供を行っている。



写真1. 展示と飼育を行っているチョウザメ館

昨年までは、飼育施設の能力が低かったため、宿泊施設内での消費を賄うのが限度であり、町内のレストランへの食材としての提供や町を訪れた人への販売はできなかった。しかし、同年に経済産業省の「ものづくり中小企業・小規模事業者試作開発等支援補助事業」により、過疎や少子化のため閉校になった町立恩根内小学校のプールを改修しチョウザメ養殖施設（SAF恩根内）増設し、生産体制の拡充を

図った。大型の円形水槽を整備し、クレンソンによる飼育水の浄化も北海道大学の支援で取り入れた。人的な面でも、「地域おこし協力隊」制度を活用し任期付きではあるが、常勤職員の確保も行っている。平成25年には35,000尾のふ化に成功し、平成26年ではベステル種、カラムトラ種、カラム種、オスミカ種を稚魚・幼魚として合計3,777尾飼育している。展示水槽ではシロチョウザメ、シベリアチョウザメ、ホシチョウザメ、アムールチョウザメ、ベステル種合計58尾を展示している。



写真2. 展示水槽中のチョウザメ親魚

行政主導で様々な制度を活用しながら、養殖の基盤を確立してきた美深町の取り組みは他自治体の注目するところとなり研修、視察の申し込みが増加している。北海道のような寒冷地では、食材となるまでには3~4年の飼育、親魚の養成には8年あまりの飼育が必要となることから息の長い取り組みとなるため、自治体が長期的なビジョンを持ち支援することが必要であろう。種苗生産やキャビアの生産のためには親魚の養成、成熟の促進が不可欠であるが、現在では安定して成熟させることができず、さらなる技術開発による飼育法の改良が必要とされ

ている。キャビアについては平成21年にワシントン条約により乱獲保護のため輸出が厳しく制限されるようになった。最近、道内では白老町や鹿追町にもチョウザメ養殖の波が拡大している。地域での養殖から地域での活用には、広範な分野の知識が必要となる。多くの会員を持つ全水技協の活躍の場でもあるのではないだろうか？

(シニア技術専門員 野村哲一)

## 会員通信

### 1. 旬に湧くコウイカ

11月15日(土) この日は立冬。比較的温暖な別府湾奥でも鹿鳴越からの北風が冷たく感じられるようになった。午前6時、南の海上が明るくなり始めると、定置や磯建て網の漁船がエンジン音を響かせて港に帰ってくる。魚市場のセリ場ではすでに未明から底曳網の漁獲物がブルーシートを被って並んでいる。

午前7時になるとブルーシートが外され、朝戻りの漁船からの魚もセリ場に並び、さらには他地区からの活魚トラックの品物も揃って、セリ場では魚を品定めする仲買人と一般買い物客でごった返してくる。

セリ場を概観すると、大型のブリ、サワラ、マダイが目を惹く。多いのはイボダイ、マアジ、イカ類。午前7時30分、セリが始まる。水揚げの類別構成をみると出現種数は、魚類が48種、甲殻類が7種、軟体類が11種で、合わせて66種で、前月に比べ魚類が7

種、軟体類が3種増加したが、甲殻類が2種類減ったため計8種の増となった。一方、出荷函数は247函の減で、魚類と甲殻類の減少が大きく特に魚類の減少率が16.1%と大きい、これにはイボダイの減少が大きい。

次に、水揚げの上位10傑は、魚類が5種、軟体類4種そして甲殻類が1種は入り、軟体類の健闘が光る。これにはカミナリイカの豊漁が大きく貢献している。

魚類の変動をみると、9月～10月に大量に水揚げされて首位を占めたイボダイが後退し、マアジが首位に立った。旬を迎えたコウイカ類は、シリヤケイカが第3位、カミナリイカが第4位に、コウイカが第7位に入った。そして今月のお勧めは、やはりコウイカとその仲間だろう。地元で“きつきょう”と呼ばれるカミナリイカ、“こぶいか”と呼ばれるコウイカ、“しりくされ”と呼ぶシリヤケイカは、今が旬。肉厚だが身が柔らかく、コリコリした食感には人気がある。寿司ネタにも最高だ。



写真1 コウイカ  
 (“こぶいか”と呼ばれ、“はりいか”  
や“まいか”とも言う)



写真2 カミナリイカ  
（“きつきょう”と呼ばれる。背中の  
リップマークが愛らしい）

### いか刺して 友を誘って 酒交わす

（上城義信（大分県杵築市））

（寄稿）

退職後の生活とは — 慣れてしまえば天国 —

秋山 敏男

JFSTA NEWS に「何でもいいから退職後のことについて書いてほしい」との依頼があり、退職後、今日までの来し方を振り返り、また、現在の思いをまとめてみました。

#### 1. 退職後の仕事

人によって退職後に悠々自適の生活に入られる方、新たな仕事につかれる方、人それぞれですが、私は躊躇なく後者を選びました。退職後の生活の激変は、日本のみならず米国でも元サラリーマンの体調に重大な悪影響を与えているとのデータがあります。退職2、3年後に力尽きる方も少なからずいるようです。退職直後は、昼間にスーパーマーケットに出かけるにも後ろめたさを感じたものです。精神的な安定ができるまでは、空いた時間には伊勢神宮の125社巡りをやったり、熊野古道を一人で歩いたりと苦労しましたが、いつの間にか「暇のある境遇」に少しずつ慣れてきました。と同時に、フルタイムではなくとも、とにかくミッションを持ち、通勤らしき行動を続けられる環境が必要だとも思いました。

（1）（独）水産総合研究センター（水研センター）の嘱託として

平成21年3月に水研センター退職後、幸いなことに、かつての職場から仕事の提案を頂きました。それは、センターの嘱託として各府県を巡り、水研セ

ンターに対する「増養殖研究ニーズ」を収集し、今後の増養殖研究分野の活動や職員業務の参考とするためのものでした。そこで、まず増養殖関係者からニーズを集めてくる計画を練りました。

従来から、ニーズ収集にはアンケート調査が多く実施されています。通常は、質問用紙を郵送して回答を回収する方式が効率的なのですが、今回の調査では、質問者が対象者の職場で直接お話を伺う「御用聞き」方式を採用しました。この方がより本音に迫れ、質問内容も臨機応変に変化させることができます。ところが、旅費予算がついて無かったので、ほとんどの出張で自腹を切らねばなりません。しかし、現役時代から自分でもぜひ調べてみたかったことなので・・・・・・。でもちょっと辛かったなー。

最後の5年間の勤務先は、増養殖研究所、瀬戸内海区水産研究所そして西海区水産研究所と、魚介類養殖が盛んな西日本が中心で各県の養殖研究者と人的な交流もあり、訪問先の選定には困りませんでした。また、訪問先のアレンジをして、案内までしてくれる協力者も現れました。5月から訪問を開始し、10ヶ月間かけて千葉県から鹿児島県までの1都2府16県、計77名の方々と面談しました。対象者は、県市の水産行政・研究・栽培センターの職員、養殖・種苗生産業者、漁連等の役職員、飼料メーカー等企業の管理職員、水産ジャーナリスト、大学理事といった方々です。収集した内容の概略を御参考までに以下に示しました。（注：あくまで6年前の結果です）

1) 漁業・養殖業全般の現状認識と問題点等について：

- ・沿岸漁業は資源減少、魚価低迷、高齢化で各地とも深刻な状況。養殖業も採算割れの経営体が多く、家業を子供に継がせる意志がない漁家が多い。漁協の組合員数も減少。
- ・水産物の輸出が奨励されているが、日本産の魚に課せられている厳しい規制を日本向けの輸入品は受けていないなどの「輸出入制度への強い不公平感」が存在。
- ・魚類よりも取組やすい貝類養殖の推進を施策の主軸にした府県もあり、増養殖研に対して「貝類研究の強化」を要求。
- ・養殖業の生き残り策としては、①経営規模拡大による価格決定権の確保、②経営・流通・販売の分かる人材の養成あるいは確保、③資本力の確保、④貿易不均衡の是正・支援体制の確立などの提案。

2) 増養殖研究のニーズについて：

- ・10年前の調査では、次代の養殖有望魚種は、「クロマグロとハタ類」。本調査では、むしろ「現在の養殖主要魚種の改良・高品質化が最重要ターゲット」であるとの意見が多く、「養殖魚介類の品種改良研究」に大きな期待。育種研究が重要であり、今後の養殖研究の主軸。
- ・生産者の都合だけでなく消費流通販売側の要請も参考にすべき。
- ・その他、具体的な要望として安価な飼料の開発、仔稚魚期や貝類の疾病診断技術の向上、各種ワクチン開発と速やかな認可、医薬品の魚種指定の緩和など。

- ・増殖対象種としては、キジハタ、オニオコゼ、アサリ、ハマグリ、ナマコ、アオリイカなどに注目。

### 3) 増養殖研への要望

- ・増養殖研は栽培部門の専門家との繋がりが薄い。
- ・藻類・介類の研究者が少なくバランスを欠いている。特に二枚貝研究者が少ない。
- ・水研センターの増養殖関係部長と業界の間に距離がありすぎる。
- ・増養殖分野は組織的に動いていない。資源分野のように組織的な行動を。
- ・環境、病気、飼料などの分野が個々に研究しているように見える。連携して研究を。

調査をつうじて、応用研究所の使命は現場に確実に貢献する研究成果を「タイムリー」に出すことだと痛感しました。また、大変うれしかったのは、増養殖研究所職員を対象とする講演会で本調査の結果を報告後で、数人の若手研究者が個別に私のところへ来て、「発表スライドをもう一度見たい」と言ってくれたことでした。水研の研究職員もまだまだやる気がある！！（調査の内容は、湊文社の月刊アクアネット 2013 年 1 月号「養殖改革への熱き期待」にも掲載されています）

#### (2) 三重大学での勤務

水研センター本部の紹介で平成 21 年 10 月から三重大学に務めることになりました。採用までには紆余曲折あって、結局、特任教員で採用され、26 年 3 月まで採用形態を色々に変えながら在職していました。ここでの勤務では自分に求められている要求がかなり高かったように感じました。研究予算の獲得が重要な任務の一つなのですが、文科省に人間的関係のない者にとっては、結局、古巣の農水省の研究予算をターゲットにせざるを得ません。しかし、ラインを外れた者には古巣といえどもハードルは決して低くはありません。

呆然と佇んでは何事も進まないもので、まず県行政、県水試、増養殖研および三重大学水産部門の 4 者が集うテーブル造りをして「三重地域産学官連携水産研究連絡会」と呼称しました。研究予算の共同提案、各組織の研究者・研究情報の交換、成果発表会の共催、学生への研究機関・県庁紹介の講演会開催などのシステムづくりを行いました。しかし、研究予算の獲得では、基礎研究色の強い大学を中核機関とする課題は、農水省では狭き門の感がありました。県が主導する申請では、県の力もあり、在職中に 2 課題が採択されましたが、大学提出の課題では採択は皆無でした。もちろん私も毎年霞が関に行き、担当官の方々と面談し、三重県の水産研究ニーズなどについて情報交換させていただきました。審査制度の確立している現在では、どの程度役立っているのかは不明ですが、親切に対応して頂いた担当の皆さんには本当に感謝しています。また、大学の業務に無知な私でしたが、周囲の先生方の忍耐強いご指導・ご協力のおかげで何とか勤務できました。

#### (3) 農林水産・食品産業技術振興協会 (JATAFF) のお仕事

何故か JATAFF より、農水省農林水産技術会議が東北の農業・水産業復興の

ために進めている「食料生産地域再生のための先端技術展開事業（先端プロ）」における進行管理のお話が舞い込みました。東北水研に約一年在職したとはいえ、ほとんど土地勘のない私を誰が推薦したのか今もって全く分かりません。それはともかく、何らかの東北復興支援ができればと常々思っていた私には願ってもない申し出でしたので、二つ返事で承諾いたしました。ご参考までに、東日本大震災による水産被害、復興の現状、そして事業の内容等について簡単に記してみました。

平成 23 年 3 月 11 日（金）に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴って発生した津波による東日本大震災は、1 万 6 千人の死亡者、3 千人近い行方不明者、被害額 17 兆円の多大の被害を及ぼしました。水産関係施設の被害も総額 1.4 兆円と言われ、その 65%は漁港の被害です。都道府県別では、岩手、宮城、福島の子三県で全体の被害額の 91%を占めました。

岩手県の水産復興状況(昨年)は、漁船登録数の復旧率で 73%、定置網 84%、養殖施設で 65%と、養殖施設の遅れが目立ちます。一方で、サケ回帰数やアワビ資源では減少が顕著ですが、サケ稚魚放流数やアワビの放流個体数はすでに被災前の水準に回復しています。宮城県の状況は 25 年の段階で、漁船登録数で 90%。養殖関連では、カキ生産量で 28%ですが、ワカメは 71%、ギンザケは 78%に回復しています。ホヤは昨年から販売が開始されましたが、韓国への輸出は未だ止まったままです。全体的には、生産回復は進んでいますが、失ったシェアの回復では困難な状況が続いており、新商品の開発や新たな販売ルートの開拓が求められています。

農林水産技術会議が実施している先端プロ（H23-29 年）は、実証研究の形で事業を展開しています。つまり、最先端の技術を使って現場と協力しながら速やかに研究を実施し、産業の創出・改革を手助けするものです。技術会議から求められている目標は、産業現場における収益率の倍増・コストの半減です。大変高いハードルですが、運営会議や推進会議において常にこの掛け声がかかけられ、経済面からの検討が求められています。この点が、これまでの研究とは全く異なっており、研究担当者への重しとなっていますが、皆さん真面目に正面から取り組み、奮闘しています。

私は沿岸環境・増養殖分野を中心に 5 課題について、それぞれ岩手県・宮城県における実証研究の進行管理を専門プログラムオフィサーとして委託されています。今回の復興支援事業の特徴は、研究機関における開発技術の提示のみにとどまらず、品質評価管理・加工、さらに流通・販売部門との連携も図られています。つまり、生産から消費者の手元までの全てを俯瞰しながら事業が展開され、その意味では、実用的かつ達成感のある事業だと思います。

行われている水産系の事業は下記の通りです。（課題名は短縮しています）

網羅型研究（岩手県）

- ① 持続的な漁業・養殖業生産システム（海況観測システム、ワカメ・サケ・カレイ類等の増養殖）
- ② アワビの緊急増殖技術開発

### 網羅型研究（宮城県）

- ① 貝類（マガキ）養殖業の安定化、省コスト・効率化
- ② サケ科魚類（ギンザケ）養殖業の安定化、省コスト、効率化

### 個別型研究

- ① 養殖カキの共販事業における予約取引市場

これらの研究の構成全般を整理してみると、参画機関のうち教育研究機関が 51（大学 23、高専 0、国研究機関 15、県 13）、民間団体が 40（企業 37、漁業団体 1、その他 2）となっており、研究対象も海洋・生物環境、機器・製造装置開発、増殖技術、養殖技術、畜養技術、加工技術開発、食品開発、鮮度・品質管理、流通・販売、ICT 活用、エネルギーと、参画機関や研究対象も多岐にわたっています。漁業団体の参画が少なすぎるように見えますが、協力機関として多くの漁協や支所が研究の実証活動に参加しており、常に意見交換がなされながら研究が進められています。

水産研究分野の支援事業では他省庁の事業も合わせれば、平成 26 年までに少なくとも 160 億円の予算が投じられています。先端プロの合計額は約 14 億円と決して多くはありませんが、効率的な取り組みで着実に成果を上げつつあります。この事業に参加させて頂いて、心から感謝しています。水産業界への最後のご奉公として、感無量です。



写真1. あまころ牡蠣

宮城県北部の水深の深い低水温域で試験養成され、夏でも生本来の生態と同じ干出条件下で試験養成され、食可能な未經産カキ。東京のオイスターバーに試験出荷。



写真2. あたまっこカキ

宮城県松島湾でカキ本来の生態と同じ干出条件下で試験養成され、波で洗われた白い貝殻が特徴。塩釜のレストランに試験出荷。

## 2. 老後の趣味として

昔から、園芸、テニス、ウォーキング、登山などをやっていたのですが、50歳に到達直前の頃、ある雑誌に「退職後にやる趣味は50歳から始めないと間に合わない」との記事が目に残りました。そこで自分がやりたくて、未だやってないことは何かを真剣に考えていると、「陶芸」の二文字が浮かんできました。早速、“やるのは今でしょう！”と、町の文化教室に飛び込みました。教室では、男性は黙々と作陶し、女性はペチャクチャとお喋りに興じていて手元は止まったまま。しかし、ここで泥いじりの楽しさを知り、2年後に単身赴任の旅に出た後も、先生を変えながら、今日まで陶芸を続けてきました。一方、退職4年前に瀬戸内水研（広島県廿日市市）に転勤になった時に、同僚

であり、大学の同級生でもある有馬郷司氏（有害物質の専門家）が多忙で仕事に疲れていたため、気分転換を図るため中国新聞社の文化教室に通うことにしました。最終的に彼は水彩画、私は昔から憧れていた水墨画の講座に登録しました。その後、私は西水研（長崎市）に転勤となりましたが、面倒見の良い先生（是方美葉女史）から離れられず、深夜バスなど乗り継いで月1回は広島通いとなりました。退職後の今も数か月に1回は、自家用車で高速道路を飛ばし、教室に顔を出しています。

我々が同時に退職した年に、無謀にも有馬氏が個展を開催したいと言い出しました。私もいつか上手になったあかつきには開催するつもりではいたのですが、まさか退職直後がその時とは思っていませんでした。しかし、いつもは優柔不断な彼がその時は、決然としていました。やむを得ず、恥も外聞もなく第1回目を世界遺産である安芸の宮島にあるギャラリー宮郷で開催しました。初心者の見るに絶えない作品群にも関わらず、100名以上の方々が義理(多分?)で見物に来てくれました。2回目からは私の陶器を売り始めました。家に溜っていた作品が家族に疎まれ始めたこともあります。人にあげる選択肢もありましたが、好きでもないものをもらった時の困惑が想像できたので、会場で安価で売ることにしました。お客さんは嫌なら買わなければ良いのですから。彼も私もさすがに画は未だ売る気がありません。時々、欲しいという方が現れますが、まだ作品の質に自信がなく、値段をつける度胸がわいてきません。

お客さんは、親戚、友人、瀬戸内水研を中心とする水産の研究者やパートの女性陣ですが、時々、国内外の観光客や宮島の町の住民もやってきて陶器を買ってくれます。中国、英国、米国に渡った作品がリビングに飾られているのを想像するのは楽しいものです。実際は倉庫の中かもしれませんが？ また、広島で顔の広い有馬さんの芸術家仲間が来てくれて、いろいろと作品批評をしてくれます。毎年、日展入選の女流画家も来てくれます。女房の批評は無視する私ですが、この方の批評には真面目に耳を傾けています。また、我々の個展（二人展）は友人達の旧交を温める場、親戚同士で出会う場、宮島の紅葉狩り見物の帰りに立ち寄る場などで使ってくれているなど、結構、見学者自身の楽しみにもなっているように思います。さらに、去年は、やはり水研センター職員だった内田卓志氏（沿岸生態が専門）の油絵展示が加わり三人展になるなど、出展者も増えつつあります。

自分たちだけの趣味に終わらず、人の出会いの場にも利用してもらえる個展の開催は、最初の恥を乗り越えさえすれば、老後の楽しみを得る良質なツールだと思います。また、販売するという行為はこれまでの研究サラリーマン生活では味わったことのない極めてエキサイティングな経験です。お金を頂いてお客様へ頭の下げる時など、とても新鮮な気持ちです。もちろん、職場の上司に頭を下げる時よりも何十倍も楽しい。

### 3. 結語

現役時代には「年寄りにはできるだけ現役世代や若者の邪魔をすべきではない」と考えていましたが、その自分が今もって各種事業等に手を突っ込み続け

ています。もしかしたら、今の自分は、老醜と老害を巻き散らかす存在なのではとも思っています。先代の市川猿之助が若い時に歌舞伎界の高齢者の振舞いを嫌って「自分は50歳過ぎたら歌舞伎界から身を引く」と述べていました。しかし、彼もまた50歳到達後も舞台に出続けていました。私自身は、積極的に現役の現場に立ち入る気は毛頭ありませんし、古い考えで若者をかき回す元気もありません。しかし、この頃は、現役世代からお呼び頂いた時には、素直に応じようとするようになりました。役立たずになれば自然と声もかかからなくなるはずですしね。一方、自分のように小さな存在が世間のお役に立とうとすると、自分が歩んできた道（分野）の上でしか、役立つ手段が無いのだとも自覚しています。

人から頼られる、あるいは世の中に（家の外にも）「居場所」を持つことが大変重要と思います。それは仕事だけではなく、趣味の世界でも、ボランティアの世界でも見つけることはできると思います。人との関わりを維持し、ほんのわずかでも感謝してもらえることがあれば、今後も生き抜けるような気がしています。

（公益社団法人農林水産・食品産業技術振興協会 専門プログラムオフィサー）

## 会 務 報 告

### 第1回 沿岸域の豊かな漁業生産の維持に関する研究推進委員会を開催

日時：平成26年12月10日（水）13：30～17：00

場所：一般財団法人農林水産奨励会 A 会議室（三会堂ビル2階）

出席者（敬称略）

委員：鈴木輝明、反田 實、中田喜三郎、松田 治、山口徹夫、山田 久

協会：川口恭一、原 武史、井上 潔、三戸秀敏、井上慎吾、池田宗平

オブザーバー：秋山敏男（元水産庁西海区水産研究所長）、高場 稔（公益財団法人広島県漁業振興基金専務理事）、本西 晃（株式会社日本海洋生物研究所技術顧問）、白石 學（一般社団法人マリノフォーラム21技監）、松里壽彦（当協会顧問）、堤 清樹（一般財団法人東京都内湾漁業環境整備協会主査）、今尾和正（株式会社日本海洋生物研究所取締役）、長屋信博（全国漁業協同組合連合会代表理事専務）、樋口和宏（全国漁業協同組合連合会漁政部主務役）、酒井保治（いであ株式会社顧問）

概 要

1. 沿岸域の豊かな漁業生産の維持に関する研究推進委員会設置要領により、委員長には松田治委員を指名し了承された。
2. 関係資料等に基づき「栄養塩濃度とノリ生産量の関係」、「栄養塩濃度と魚介類生産量の関係」および「播磨灘の栄養塩管理や施肥の効果」について議論し

た。

### 3. 今後について

- ・COD を環境基準として設定しておくことの妥当性について論議する。
- ・ダムからの緊急放水について、ルール化（制度設計）について論議する。
- ・瀬戸内海法改正案に向けての提言を検討する。
- ・必要に応じて専門家との意見交換をする。

（文責：三戸）

## 事務局からのお知らせ

### 沿岸域の豊かな漁業生産の維持に関する研究推進委員会（第2回）の開催予定

開催日時：平成27年3月24日（火）PM 13:30～17:00

開催場所：株式会社共同通信会館5階 A会議室

東京都港区虎ノ門2-2-5（三会堂ビルの向かいのビルです。）

参加申し込み：平成27年3月13日までに井上宛（inouye@jfsta.or.jp）

### 平成26年度第4回理事会及び平成27年度総会を開催します

- ・平成26年度第4回理事会

開催日時：平成27年3月20日（金）PM15:00～

開催場所：三会堂ビル2階S会議室

東京都港区赤坂1-9-13

- ・平成27年度総会

開催日時：平成27年6月19日（金）PM15:00～（閉会后懇親会を予定）

開催場所：三会堂ビル2階S会議室

### NEWS原稿を募集します。

今回は、シニア技術専門員の野村会員からの便りと、上城会員の日出町魚市場便り、三重県在住の秋山敏男会員からの寄稿をお届けします。

JFSTA NEWS を、会員同士をつなぐコミュニケーションツールとしても活用することに力を入れたいと考えております。会員各位におかれましては、地方の身の回りの水産関連情報や近況等、自由形式でお寄せください。なお、寄稿いただいた方には、ささやかですが記念品をお送りすることになりました。

一般社団法人 **全国水産技術者協会**

〒107-0052 東京都港区赤坂一丁目9番13号三会堂ビル9F

TEL 03-6459-1911 FAX 03-6459-1912

E-mail zensuigikyo@jfsta.or.jp

URL <http://www.jfsta.or.jp>